広告を出したい男

前野幸伸
斎藤史郎

●人気のない公園
公衆トイレ
前野が公園脇に車を止め焦った様子で降りてくる。大便を我慢していた様子。
多機能トイレに入る。用を足し安堵する前野。
手を洗い、ドアを開けようとするが開かない。
大きな鉄の引き戸。いろいろとやってみるが開かない。
携帯を探しポケットを探るが、車の中に置いてきたようだ。
なんとかして開けようとするが開かない。ドアを叩く。

前野　「・・すいません」

ドアを叩く

前野　「・・すいませーん」

前野　「誰か・・誰かいませんか？」

力任せに開けようとするが開かない。

前野　「すいませーん・・・・」

しばし呆然とする

しばらくすると
史郎がトイレに近寄ってくる。

前野　「（人気に気づき）・・あの！すいません！」

前野　「すいません！」
前野　「あの・・」
ドアを叩く
史郎　「・・どうしました？」
前野　「あ！よかった。すいません。ドアが、あかなくなっちゃって」

史郎　「・・あかなくなっちゃいましたか？」
前野　「そうなんですよ」

ドアを開けようとする前野

前野　「なんか、引っかかってるみたいで」
史郎　「そうですか」
前野　「そうみたいなんです」

史郎　「それは大変ですね」

前野　「・・あの」
前野　「そっちから・・何か引っかかってませんか？」
史郎　「ああ・・。何か引っかかってるかもしれません」
前野　「何とかなりませんかね」

史郎はふらりとその場から離れる

前野　「・・・・すいません」
前野　「あの・・あれ。・・・すいません。すいませーん！」

前野　「すいませーん！」

前野　「あのー・・すいませーん！」

ドアを叩く前野
しばらくして史郎は缶ジュースを買って帰ってくる。缶ジュースを開けて飲む史郎

史郎　「（ジュースを飲み）ああ・・」
前野　「（気配に気づき）あ！すいません！」

史郎　「この公園、あまり人が寄り付かないんですよ」
前野　「え・・・」
史郎　「昔、この公園で学生のリンチ事件があったらしいんです」
史郎　「まあ僕が生まれる全然前の話ですけどね」
史郎　「（ジュースを飲み）ああ・・」
前野　「そうなんだ」
史郎　「リンチ公園って呼ばれてたりもしましてね。殺された生徒の霊が出るなんて噂もあって。あんまり人が寄り付かないです」
前野　「そっか」

ドアを開けようとする前野

前野　「あの・・そっちからも、ちょっと、引いてもらえないか？」
史郎　「（ジュースを飲み）・・マウンテンデュー」
前野　「は？」
史郎　「ジュースです。マウンテンデュー。この辺じゃ、ここの自販機にしかなくて」

史郎　「僕はよく買いに来るんです。マウンテンデュー」
史郎　「（ジュースを飲み）ああ・・」

前野　「なあ。そっちからも開けられないか？」
史郎　「山のしずく」
前野　「何が」
史郎　「マウンテンデュー。直訳すると山のしずくなんです。」
前野　「誰か呼んでくれないか」
史郎　「ピンとこないですよね。山のしずく。何ですか。山のしずくって。どういう意味ですかね」
史郎　「でも僕はこの絶妙な炭酸の具合が気に入ってます」
前野　「どうにかならないかな？」
史郎　「どうにもクセになるんですよね」
前野　「なあ。困ってるんだ」

史郎　「あの車あなたのですか。公園の入り口のところにあるやつ」
前野　「ああ」
史郎　「国道の方から来ました？」
前野　「ああ。そうかな」
史郎　「人形の嘉月の脇道をはいって」
前野　「そうだったかな」
史郎　「その向かいに人形の嘉月とどうぶつ病院の看板がありましたよね」
前野　「・・ちょっと覚えてないけど」
史郎　「その間に広告募集って書かれた、空き看板がありましたよね」
前野　「どうだったかな」
史郎　「あるんですよ」

史郎　「僕は、その空き看板に、広告を出したいと思ってるんです」
前野　「・・広告？」

前野　「ん」

前野　「君は・・中学生か？」
史郎　「今年、高一です」
前野　「・・そうか」
前野　「なあ人を呼んでくれないか？」
前野　「もういいから、誰か呼んできてくれないか？」

史郎　「何の広告か気になりませんか？」
前野　「・・・・」

前野　「何の？」
前野　「何の広告を出すんだ？」
史郎　「まあ広告っていうかメッセージですよ」

前野　「なあ。話は後で聞くからさ」
前野　「とりあえず、ここを出たいんだ」
史郎　「・・・・」

前野　「何のメッセージだ？」
史郎　「何のメッセージか気になりますか」
前野　「ああ。何のメッセージだ」
史郎　「メッセージというか、まあ告発です」
前野　「・・・・」

史郎　「映画からヒントを得ました」
前野　「映画？」
史郎　「そういうのをアメリカの映画で見ました」
前野　「・・・・なんて映画だ？」
史郎　「タイトルは忘れました。でもそういう映画です」

メモを取り出し読み上げる史郎

史郎　「科学館の村上康介は既婚者でありながら、女性職員と不倫関係にある」

前野　「・・・それを看板にするのか」
史郎　「ええ」
前野　「人形の嘉月とどうぶつ病院の看板の間にか？」

前野　「そういうのはやってないんじゃないか」
史郎　「やってない？」
前野　「無理だろう」
史郎　「無理なんですか」
前野　「たぶんな」
前野　「オーナーだって・・人形の嘉月もどうぶつ病院も嫌がるだろ」
史郎　「でも事実ですよ」
前野　「事実かどうかはわからないけど。そういうのは無理だよ」

前野　「映画だから。それは。・・あとアメリカだから」
前野　「アメリカは自由の国だから」

史郎は立ち去ろうとする。それを察する前野

前野　「待て待て待て待て」
前野　「待ってくれ」

史郎　「村上はクソです」
前野　「そうだな。クソだな」

前野　「その村上って奴は、君と何の関係があるんだ」
史郎　「あんなクソと僕に関係なんてありませんよ」
史郎　「奴には罰を与えないといけない」
前野　「じゃあ相手の女性か？」
史郎　「・・・・」
前野　「知り合いなのか」
史郎　「鳩子ちゃんは騙されている。あのクソに」
前野　「その、鳩子さんは、何だ。君の」
史郎　「いとこのお姉ちゃんです」
前野　「・・そうか」
史郎　「鳩子ちゃんは悪くない。悪いのはあのクソです。罰を与えなければならない」

史郎　「罪を犯せば罰が下る。ジャガイモを潰せば・・マッシュポテトだ」

前野　「それは何だ？」
史郎　「アメリカのドラマで言ってました」
前野　「そうか」
前野　「何のドラマだ？」
史郎　「なんのかは忘れましたけど。そういう台詞です」
前野　「そうか」

前野　「でもあれだぞ。そんな看板を出せば、その村上って男は罰せれるかもしれない」
前野　「でも、その、鳩子さんも大変なことになるぞ」

史郎　「そうなんですか」
前野　「そうだろうな」
史郎　「じゃあどうすればいいんですか」

史郎　「じゃあどうすればいいんですか」

史郎泣いているようだ。

前野　「いやいや」

前野　「もっといろいろあると思うぞ」
前野　「そんな映画とか参考にしなくても」

前野　「とりあえず、ここ開けよう」
前野　「な」
前野　「そしたら・・相談にのるから」

ドアを開けるのを手伝う史郎。内側からも開けようとする前野。
やっとドアが開く。多目的トイレから出る前野。

二人で自販機に行きジュースを買い、飲みながら相談に乗る前野。

終わり